

夫の帰郷

堤 洋子

夫、昌弘まさひろの満中陰まんちゆういんが過ぎて春の彼岸が近くなった。弔事も一段落したため、絢あやは昌弘の実家に報告がてら義母の見舞いに向かった。

宮崎の実家へは結婚してから、昌弘の希望で益か新年のどちらかには欠かさずに訪れていた。昌弘は海の色や自然の風景や星空が気に入っていた。

夫にとってはなつかしい郷里だが、絢あやにとっての実家行きは負担でもあり、面白くもなかった。

義父母は子どももない絢夫婦を歓迎するでもなく、淡々と受け容れていた。弟夫婦と実家で一緒になることもあった。弟たちは子ども二人を連れ、北海道から訪れた。両親は目を細めて、孫に玩具や菓子や小遣いを与えた。姑は弟の嫁を可愛がっていた。陰でこっそり何かを渡すところを目撃したこともあった。食卓には弟や嫁の好物が並んだ。それでも昌弘は宮崎の食べ物は何でもおいしい、と満足そうだった。絢の好物を姑が聞いてくれたことはない。

絢は宮崎行きの飛行機に搭乗した。

ことしは義父の十七回忌だった。本来なら隣のシートには昌弘が座っているはずだった。年始に病院から自宅に外泊をしたときは、帰省を心待ちにしていたのに。

富士山のお鉢までがくつきり見えた。前回のフライトでは眠っていて見過ごしてしまった。きょうの富士山が今まででいちばん綺麗だったぞ。絢が目を覚ますと、昌弘が教えた。なぜ起こしてくれなかったのよ。頬をふくらませた絢に、何度か声をかけたり、つついたりしたけど反応なしだったよね、と冷たくなったコーヒーをひとくち飲んだ。

昌弘は日南海岸に沿った小村で生まれた。

父親は大変な努力家だった。国家公務員試験を受けて、裁判所の書記官になった。これを機に一家は宮崎市内に居を移した。父親は肋膜炎を患ったので、兵役は免除された。昌弘が五十四歳の時、父親は心筋梗塞で他界した。八十五歳だった。

母親は昌弘が三歳のときに結核で亡くなったので、父は母の妹を後妻に迎えた。兄弟四人のうち、昌弘だけが前妻の子どもだった。

父親は転勤族だったが、最終勤務地の宮崎市に戻ってきた。退官後、家を新築し、墓も建てた。父も昌弘も、日向灘から太平洋に続いている宮崎の海が好きだった。墓は海の方に位置し、陽光が惜しみなく降り注いでいた。父も生母も眠っている。おれもここに入るんだ。頼んだぞ。還暦を過ぎると、昌弘はそんなことを言った。絢は、はいはい、と軽く受け流していた。まだ先の話とでも思っていたのに、夫は七十歳で逝ってしまった。

昌弘とは職場結婚だった。

昌弘は業務用カメラメーカーの技術者で、勤務先は母の実家近くだった。幼いころ、母や伯母がその会社名を口にしていて、そのことを思い出す。大手企業ではなかったが、親しみがわいて入社を決めた。

昌弘は一七五センチと背が高くがっしりしている。無愛想なご面相だが笑うと穏やかさが滲んだ。

付き合い始めてわかったが、ふたりの自宅は大田区で近隣の町内だった。結婚後は区内の戸建てをローンで購入した。

昌弘とは波長が合った。加えてありのままの自分を出せた。緊張もしないし、安心感があった。自然体でいられるのだ。絢と違って神経質ではなく、南国育ちらしく大らかで、絢の存在そのものを受け容れてくれる。

昌弘は宮崎の自然の中で、性格が形作られていったという。日ごろから、おれはクヨクヨしないし、細かいことは気にしないし欲もない、と言っていたけれど、それも宮崎の自然に育まれた結果なのかもしれない。

何よりも羨ましかったのは、意にそぐわないことに対しては、相手の不快を招かないような受け答えをすることで。絢はそんなとき、直接的に嫌だとか、攻撃的になってしまう。どうしたら昌弘のようなことばが出てくるのだろうか。

年を重ねるといっしょに暮らすには、胸をときめかす人よりも、人間的に豊かな人のほうがいいのかもしれない。誰にも相談することなく、絢は昌弘との結婚を決めた。

育ての母、みねは九十一歳になり、認知症のためグループホームに入所している。

独身の妹二人が母の面倒をみていた。施設任せにせず、週に一回は外出といって自宅に連れ帰っている。

施設入所まえは、夜中に何度かトイレに起こされたり、食事時には付き添って介助したり、という具合だった。上の妹律子は目眩に襲われ、胃腸の調子も悪くなった。六十六歳の律子が主な介助者だった。下の妹マサヨは六十三歳で絢と同年だった。身体

が弱く、無理のできないタイプだった。

母親を施設に入れることには、抵抗があったらしい。グループホームの話があったとき、律子から相談を受けた。第三者というのは冷静だ。そういうチャンスを逃すと、入所したいときには、空気がないかもしれない。絢は施設入所をすすめた。昌弘や弟にもアドバイスしてもらったら、と言ったが、男は駄目、と切り捨てた。

気丈な姑が認知症になった、と連絡をもらったときは信じられなかった。舅が逝ってから心臓にペースメーカーを埋め込んだことは妹から知らされていた。

俳句が趣味で、仲間と吟行を楽しんだ。投句が入賞し、幾つものトロフィーが飾ってあった。孫を詠んだ句がラジオ放送され録音したカセットテープを送ってきたこともあった。

家事は娘たち二人が担っていた。舅がいなくなった後、姑は夫の面倒をみる必要がなくなった。家事も娘たちがすべて負っていた。後ろ楯を失ってからは、作句もせず一日中ぼんやりしていると妹は心配していた。舅が家内を仕切り、妻子に厳しい人だったから拍子抜けしてしまったのかもしれない。料理の腕も確かなのだから、家事などをしてもらえばいいのに。認知症になったのは、娘たちが姑を大事にしすぎたからだと思う。

富士山上空を過ぎた。絢は心の中で昌弘に謝った。

昌弘は小中学校時代の多くを宮崎市内で過ごした。

みねは昌弘が三歳のときに嫁いできた。育ての母といっても、物心つかないうちから育てられたから、実母との距離感はずかだらう。

みねは昌弘を実子三人と分け隔てなく育ててくれたらしい。旧盆には、冷や汁を必ず作って待っていてくれたし、正月には、小豆ご飯を炊いてくれて帰りには折り詰めにして持たせた。どちらも夫の好物だった。

実家に来ると昌弘は、学び舎だった小学校と中学校に寄ったり、海岸を見たり、祭りが行われる神社に出かけたりしていた。幼い日の思い出を蘇らせていたのだらう。

宮崎県内でクラス会があれば、万障を繰り合わせて出席していた。人付き合いの少ない人にしては珍しかった。幼い日に暮らした土地は身体の一部なのかもしれない。

昌弘にとって故里は遠くにありて思うものではなく、いつの日にも心の中にあるものなのだらう。

昌弘の死亡を知らせた日、義妹は怒りにも似た落胆を露わにした。

わたしが、あとで実家にいきます。お母さんのこと、心配でしょうから、東京には来

なくても大丈夫です。そう伝えると、受話器から少しだけ 明るくなった声が響いてきた。「待っちゃるわ。お寺さんに都合聞いて、お墓の用意もしちよくかい」

義妹にとって、昌弘は長男だから、実家の墓に入るものと心得ているらしい。

絢は兄弟がいない。両親の墓が自宅近くにある。昌弘はここに合葬することにした。齢を重ねれば宮崎まで出向くのは難しくなるだろう。今後は夫の年金の七十五パーセントが遺族年金として支給されるという。加えて絢には持病があった。肺の抗酸菌症で、無理をすると咯血するのだ。日常的にも少量の血痰が出る。医者からは無理をしないように言われている。経済的にも身体的にも二つの墓は守れない。

これらの事情を手短かに説明してから、律子に、夫は大田区にある両親の墓に入れます、と告げる。

しばらく会話が途切れる。律子の動揺が伝わってくるようだ。でもこれだけは妥協できない。

「あんたは昌弘さんの気持考えもせんで。自分勝手やわ。どんなに昌弘さんが宮崎を好きだったかわかるやろ」

痛いところを突いてくる。

「分骨もせんと？」

分骨すれば宮崎の寺とも関わりを持つことになる。分骨はしないつもりだと言った。

怒気を含んだ声がとんできた。

「山際の家を無縁仏にするつもりなん」

「こちらの墓もわたしの代で終わります。あとはお寺さんで永代供養をしてもらいますから」

昌弘には申し訳ないが、山際家の墓には入りたくないというのも本音だった。

「兄が可哀相じゃねん。父や兄のお母さんも入つとるのに。永代供養ならこっちでもできるやろ」

「そうですよね。わかりました」

昌弘の死んだ日に諍いをするエネルギーは持ち合わせていない。

義妹たちは二人とも服飾関係の仕事をしていた。上の妹律子はアパレル会社の課長までやって定年退職をした。

下の妹マサヨは、近所の洋裁店に勤め、服を仕立てていた。腕を買われて高級生地ばかり任されていた。還暦を過ぎてから白内障の手術をした。手仕事は目と気をつかう、細かい作業だった。定年はないが、引き留める経営者を説得し、六十で退職した。

二人とも年金があるので生活には困らない。義父の遺産も相当あるらしく、キッチンだの、リビングだの、トイレだのと、リフォームを重ねている。昌弘は父親が他界したとき、育ての母や妹たちのために遺産を放棄した。

義妹たちだけでも、寺と墓の維持費用は捻出できるにちがいない。義母の葬儀や義父母の年回など、大きな出費は義弟と分担するつもりだ。

実家に着くと律子たちに手土産を渡した。二人のどちらからも礼のことは聞かなかった。

姉妹の態度がよそよそしい。墓の問題が後を引いているのだろう。

宮崎に行く旨、連絡したときには絢の事情を理解してくれたようだった。実家を訪れてみると、痾しこりは溶けていなかった。

これまでも義妹とはそれほどうまくいっているわけではなかった。

絢は義母に嫁として扱われていたが、義妹も兄の妻ではなく嫁として扱っている。嫁は一段格下に見られている。

お中元やお歳暮の礼は言ってきたけど、その間に送るちょっとした品々——長野の従姉から送ってきた野菜や果物、ドイツの友人からのクッキーやチョコレート——に対しては届いたという連絡さえもなかった。あるとき、品物が届いたか電話したところ、たちまち不機嫌になって驚いたこともある。

しかし、律子は母には優しく、介護に生甲斐を見出しているという、尊敬すべき点もある。しっかり者だが、絢はきつい性格を冷たいと感じてしまう。きついを通り越して怖い人という印象さえもってしまう。いったん怒らせたら決して、許さないのかもしれない。

マサヨのほうは絢と同じ年で親しみが湧く。温和な性格で母や姉には従順だ。律子とは対照的だが、絢への接し方は姉に準じている。

昌弘の位牌と写真をとり出し、経机にのせてもらった。

心残りだった実家に来たわよ。位牌に話しかけると、高千穂峡でのスナップが笑いかけたように感じる。仏壇に手を合わせると、

「母の胃痙が始まるわ」

上の妹が急かすようにいい線香を消した。位牌と写真を掴み、絢に押しつけるようにして持たせた。

実家と同様、ここ数年は昌弘の具合が悪くて義母の見舞いにも行けずにいた。

グループホームに着くと、菓子折を渡しチーフの職員に礼を言った。相手は固辞したが、東京から来たので、とテーブルに包みを置いた。遠いところからお見えですから、今回だけは受け取りますが、次回からはご心配なく、と職員は譲歩した。次回はいつになるのだろうか。

ロビーに回ると、施設のスタッフが車椅子を押してきた。義母のみねが乗っている。三年前に会ったときにはひとり歩いていたのに。スタッフはテレビの前で車椅子のレバーを止めた。

「お義母さんこんにちは。絢です」

義母は珍しそうに絢を見た。わからんよ、私わのことだって知らん言うちゃかい。律子は肩を落とした。会社のあった福岡に住んでいたが、義父が亡くなってから実家に移ってきた。マサヨはずっと両親と暮らしていたせいか、みねはよくその名を呼んでいるという。

三年前に夫と見舞ったときは、ひとりずつ名前を呼んでいたのに。

昌弘はどうしたん、などと尋ねないのはさいわいだった。妹たちと相談して、昌弘他界のことはみねには知らせないようにしていた。

みねは義妹がどんな好物を持っていてもそっぽを向くようになった。施設の食事など見向きもしない。医師は胃瘦をすすめたが、義妹たちは反対していた。業を煮やした医師は二人に宣告した。

「このままだとお母さんを餓死させることになるよってに」

これを聞いて律子とマサヨはようやく胃瘦に踏み切った。律子は後日、昌弘に報告した。「母が餓死すると聞いて黙っていられんかったんよ」

夫はもちろん賛成した。金木犀の香る季節だった。夫自身が今年の一月に永眠してしまった。絢は義母の健在を羨んだ。卒寿をひとつ越したみねが生きているのに、七十歳の昌弘がなぜ死ななければならないのか。理不尽にさえ思える。

女性のスタッフが点滴ポールを押してきた。フックには栄養液のビニール袋が下がっている。液体は五〇〇ミリリットル入っている。二時間かかるらしい。スタッフはパジャマのボタンを外した。腹に留置してある管と栄養液の管とを繋げる。管の中をミルクコーヒー色の輸液が流れていく。

昌弘も同量の点滴を週に一回していたが、その速度を呪っていた。じっとしているのが苦痛だったからだ。しばらくは眠っているが、目を覚ますとゲームするからタブレット

ト出してと言った。碁や将棋をしているが、飽きるとまた眠ってしまう。

点滴時の昌弘はそんなことを繰り返していた。終しまいには、血管に注射針が入りづらかったり、液が漏れたりして、看護師泣かせだった。絢は、点滴が始まると、どうかスムーズにできますように、と心中で祈った。点滴が漏れると患部が腫れ内出血で紫色になる。そんな腕を見ると、昌弘が哀れだった。細い腕に刺す針が昌弘の命を延ばしてくれたのだろうか。苦しいだけではなかったか。

昌弘は酒も飲めないのに肝臓病だった。脂肪肝から慢性肝炎になり肝硬変に移行し、肝不全で命を落とした。臨終までの二年間は介護に追われた。肝硬変の合併症を発症し、一時は肝性昏睡に陥った。移植もできず、そのうち認知症状態になった。

昌弘は好んで外出していたが、近場には自転車を利用した。

自転車で転んでは、救急車で運ばれ、至急、病院まで来てくれと連絡を受けたのは五回ほどだろうか。腰を痛めた昌弘は、その数だけ車椅子生活をした。やがて主治医から、自転車も禁止されてしまった。

ジムの風呂で倒れていたところを発見されたこともある。救急車で搬送された病院では、尿路感染症を起し高熱が出ているため入院した。健康なときからジムに通っていたが、そのころは会員が運動しているところを見学したり風呂に入ったりする程度になっていた。絢は昌弘に代わって、ジムの退会手続きをした。

自転車も乗れなくなった昌弘は、セニアカーという高齢者用の電動車を利用していたが、そのころは車道を走行しなくてはならなかった。ある日、車道を逆走していたため、見ていた人が最寄りの交番に知らせてくれた。警官に連れられて帰宅したとき、絢は危うく貧血を起しそうになった。一歩間違えば命はなかったかもしれない。

肝硬変の合併症になり、肝性昏睡で退院後はタブレットや碁会所や雀荘で碁や将棋やマージャンを好んでやっていたが、それもできなくなってしまった。肝性脳症で意識障害が募って、やり方がわからなくなってしまったからだ。

その代わり、テレビで放映する通信販売の商品を手当たり次第に買うようになった。使い方がわからないのに、サイレントジュースや、長時間の充電が必要なクリーナー、進化したタブレット、持っているのにデジタルカメラや一眼レフカメラなどだ。

絢は携帯電話の発信履歴をチェックし、それらの商品をキャンセルしていた。日がたつと、通販会社から連絡が入るようになった。

「ご主人がこんな商品を購入しましたがどういたしますか」

商品名を聞き、それはキャンセルします、とかそれは購入しますとか、絢がイエス・

ノーを振り分けた。

デパートに出かけたときは、上着のポケットから何か落ちたので、調べると、犬を買うという契約書だった。欲しかったキャバリアだったが、昌弘の世話で手一杯で、すぐに契約を取り消した。

絢は昌弘が外出先から戻ると、財布やポケットを探り、不要なものを買ってないかも点検した。

不思議なことに、絢がキャンセルしても、夫は何の反応も示さなかった。買ったことさえ忘れてしまったのだろうか。

こんな夫に何度、声を荒げたことだろう。そのときの後悔から立ち直れないでいる。昌弘との幸せな想い出もたくさんあったはずなのに、ゆがんだ顔や苦しそうな表情、絢の怒声にしょんぼりした様子——そんな辛そうな姿ばかり浮かんでくる。

昌弘は入退院を繰り返し返したが、そのたびごとに早く家に帰りたい、帰りたいといって絢や病院のスタッフを困らせた。最後の入院時も家に帰ろうとはいったが、そのうちに、

「宮崎に帰りたい、宮崎に……」

朦朧とした意識の中で、はっきり言ったのだ。

「海がきれいだなあ。泳ごう」

夢をみているのか、寝言のように繰り返していた。

昌弘の潜在意識の中に、眠っていた故里の海が現れた瞬間だったかもしれない。

栄養液が義母の体内に吸収され、命を延ばしてくれる。

みねはテレビに視線を集中させた。バラエティー番組で、笑ったり、何か眩いたりしていた。腹部の違和感を忘れようとしているのだろうか。そのうち、義父の名と下の妹の名を代わる代わる呼び始めた。妹たちは出番だというように、車椅子に寄り添う。呼ばれるごとにマサヨは返事をして、はい、こきおるちゃ、と優しく言った。律子は義父役になり、何かと聞いては、肩や手をさすっていた。

テレビがニュース番組を放映している。みねは娘の手をうるさそうに振り払った。

「家に帰っちゃかいタクシー呼んで」

二人は、電話してくる、といって席を立った。戻ってくると、仕事が終わる時間やかい予約がいっぱいなんだって、となだめるようにいった。しばらくすると、また家に帰っちゃかい支度するかい、車呼んで、といいだした。みねは、カエルコールを幾度となく繰り返した。妹たちは慣れたもので、はい、分かったとか、着ていく服を用意するかいとか、今日は遅いかい明日にしよう、とかいって母親を安心させる。決して母親に逆

らわない。絢だったら、同じことをなんとも言わないでとか、うるさいわね、分かったから、とかでかたづけしてしまっただろう。

絢たちは二時間くらいで退室した。六時を過ぎていたので早めの夕飯となった。宿泊さきで妹たちの希望どおり、懐石料理を予約しておいた。昌弘と利用したホテルの食事処だった。

食事中も義妹たちとの会話は少なめだった。絢が会計をすますと、おやすみなさい、とだけ言って帰った。

翌日は六時に起きた。道行く人は疎らだった。傘をさしている。波止場までタクシーを走らせた。

波止場の建物内は、船を待つ人たちで大半の席は埋まっていた。コーヒーや味噌汁の匂いもしている。

絢は満中陰の前日に骨壺を開けた。骨片を幾つか取り出し、黒い巾着に入れておいた。絢は傘を広げて海のほうに進んだ。一隻の遊覧船の前で立ち止まる。風が斜めに吹いて傘は役に立たない。濡れるのもかまわず、バッグから黒い巾着を抜き出した。かがんでから周囲を窺う。堤防のコンクリートが風と雨に洗われているだけだった。巾着の紐を緩め、海をめぐけて中身をふるい落としした。大小の骨片が風に靡なびきながら、海中に沈んでいく。

「宮崎のお墓にしなくてごめんなさい。大好きな海にお骨を撒いたから、どうか許して下さいね」

水面に向かい叫んだ。激しい雨は昌弘の涙だ。実家の墓に入れなかった無念の涙――。絢は罪悪感に苛まれた。

今日は午前中に墓参をした。墓は菩提寺の敷地内にある。墓石をたたいていた荒天が去り、薄日が射してきた。

義妹たちも付き添ってくれる。皆で山際家の墓地を掃除し線香と花を手向ける。

律子に礼を言い、花と線香の代金を支払う。墓石の下にシートを敷いてから、昌弘の位牌と写真を安置する。

「お父さんや亡くなったお母さんと今は一緒にいますよ。こんなことぐらいしかできなくてごめんなさいね」

数珠を練りながら謝る。

「そちらのお墓で、昌弘をよろしくお願いします」

実母のそんな声を聞いた気がした。

墓参の後は読経をしてもらうことになっている。

律子が住職に絢を、兄の連れ合いです、と紹介する。義妹たちはこの住職とは長い付き合いだ。彼岸や旧盆、年始、義父の命日には必ず来宅するという。

住職の母親が最近、九十三歳で亡くなったとか、母親手製の漬物がおいしかったとかしばらくは世間話をしていた。天井には巨大な凧が張りついている。

読経の時間を律子が予約してくれたので、住職はいったん席を外すと、僧服を改めて入堂してきた。布施の額がこの地では多かったせいか、満中陰の供養をしてくれた。

供養後、絢が東京から来たことを知ると、

「今は遠くにいる方も多いですね。墓じまいをして永代供養をする方もおいでですよ」と話した。

「うちの寺でも永代供養も受け付けていますし、合葬するところもあります。何かありましたらご相談ください」

標準語での住職の提案は絢に向けられたのかもしれない。律子もマサヨも私たちには関係ないとばかり上の空で聞いている。

菩提寺での思いがけなかった法事が終わり、義妹たちと近くの中華料理店に入った。

食事が済んでも二人は勘定を払う様子もない。絢が払うのがあたりまえ、という雰囲気だ。ここの料理美味しいでしょう。律子はそう言ったきりだった。

絢は妹たちと早々に別れ、列車に乗り込んだ。昌弘が、今度宮崎に来るときは汽車に乘りたい、といていたからだ。写真を窓に立てかけた。

宮崎から東京まで、列車だと十時間以上かかる。自宅に帰り着くと零時を回ってしまふ。空路だったら家まででも、五時間あれば十分だ。

車内は読書や溜まった新聞を読む空間だった。出さなくてはならない手紙や葉書を書く時間でもあった。しかし今日は、本を広げてはすぐに投げ出した。葉書を一枚だけ書くと、気分が乗らずやめてしまった。新聞を手に取るが見出しに目を通しただけで、丸めて座席のネットに入れた。

わだかまりを残して帰京したが、絢は割り切ることにした。やっこの思いで遠路を往復したのだった。実家や墓のことで、これ以上は、悩みたくも考えたくもなかった。

春の彼岸になった。絢が墓参に出かけようとしたとき電話が鳴った。律子からだった。絢は身構えの態勢になる。

「こんあいだはお疲れさん」

心なしか律子の声に親しみが加わっている。

「お世話さまになりました。昌弘さんもきつと喜んでいることでしょう。ありがとうございます。ございました」

「それでね、弟も宮崎のお墓には入らないつもりだっていうよつちや。マサヨと相談したんだけど、将来は合葬して永代供養をしてもらうことにしたわ」

義弟の家は北海道だった。本社のある札幌市勤務になってからは、その土地が気に入って住み続けている。

律子たちがよく決心したものだ。もろ手をあげて賛成したい。

夫の実母もいずれはこちらの墓に移そう。

これで昌弘も安心して眠れることだろう。

いっしょに眠る絢の両親もほっとしているにちがいない。背が高くてがっしりしている昌弘は母の好みのタイプだった。三十歳を過ぎても嫁にいけない娘を心配した父は三十三歳で結婚した娘の晴れ姿を見ることもなく逝ってしまった。

三〇分もバスに乗ると、両親の墓がある菩提寺に到着した。

寺には公孫樹の大樹と楓や椎の高木に混じって、ソメイヨシノの古木も蕾がついて開花の準備をしているようだ。

本堂で参拝をすますと、手桶に水を汲み、緩やかな階段を上る。墓地は裏山を切り開いて造ってあり、両親が気に入って建てた場所だ。高台にあるので、日当たりも、見晴らしもよかった。

ここはわたしが生きている限り守っていくからね。宮崎は大好きな故郷でしょうけど、でも昌弘さんの会社があった大田区にわたしたちずっと住んでいたでしょう。ここが第二の愛郷パトリになってくれるといいな。絢は昌弘に向かって語りかけた。

線香の煙が立ち昇り、白檀の香が空間を満たしていった。

堤 洋子

つつみ ようこ

昭和41年 東京都品川区役所入所
昭和47年 慶応義塾大学文学部通信教育課程卒業
平成15年3月 東京都品川区役所退職